

近くて遠い国

鈴木陽子

この度の湾岸戦争で、計らずも本物の戦争場面をテレビでしかもリアルタイムで見るという経験をしてしまったが、それまでの第2次世界大戦後約45年間、少なくとも朝鮮戦争を除いては、戦争は我々日本人にとって遠い所の事と感じていたように思う。昨夏ソウルを訪れた私にとっても、現実の戦争は記憶にない歴史的又ははるか彼方の出来事であった。

夏休み気分いっぱい金浦空港に降り立ち、市内へ向うバスの中で、ガイドの宋さんが最初に発した言葉、「韓国は現在準戦時体制下にあります。」には突然冷水を浴びたような気分させられた。そして軍施設や移動中の部隊、地下鉄構内の撮影禁止、ホテルの6階以上の窓からの撮影禁止は勿論双眼鏡で覗くことさえも禁止云々という注意は、改めてこゝが世界中で最後に残された分断国家であるという現実を思い起させ、しばし緊張を味わったのだった。

韓国は不思議な国である。と同時に一衣帯水の国でありながら、あまりにも日本人は知らなさすぎるといなのが韓国を訪れての感想である。南北融和へ向いつゝあるとは言うものの、40年前同じ民族同士で戦い、一時は国土の大部分が占領されるほどであったという事実は、同じ分断国家とはいえ統一前のドイツとは根本的に違う重い歴史である。そして「日帝36年」の日本統治に対する反日感情がある。しかし現実に見える韓国は、限りなく日本に近くて外国へ来たような気がしない。ホテルの部屋で日本の衛星放送を見ているとソウルにいることを忘れてしまう。あらゆるものが日本と似ている。車も、地下鉄の車内広告も、お菓子の包装も、デパートの商品の並べ方までも。そして1人で街中を黙って歩いている分には誰にも外国人と気づかれない気楽さ。ゆえに一瞬日本国内にいるような錯覚を起すのだが、次の瞬間には全く字が読めず言葉も通じないことに気づいて、途端にはるか遠い異国になってしまう。街中にも

新聞にもテレビにも漢字は全く見当たらない。従ってハンゲルが読めなければ大変不自由でもどかしいのだが、この点香港や中国と大きく異なる点である。もっともハンゲルは、15世紀李朝第4代の王世宗の時代に科学的に編み出された文字であるから、学びやすいし、宋さんに言わせると5日間で覚えられますよとのことだった。

韓国があらゆる点で日本に追いつき追い越せという目標に向かって邁進し、その結果としての経済繁栄ぶりは驚くほどである。広い幹線道路を埋めつくす車の列、豊富な商品（例外として生花は少ない）、郊外にも拡がる高層ビル群など、韓国が中進国から先進国へ移ろうとしているものなるほどと思う。しかしその裏にある歴史的な反日感情もなお強いものがある。漢字の排除も日本占領下で日本語を強制されたことに対する反動でもある。完成品としての日本製品を見つけることはまずないし、市内にもかつての日本統治の面影を残すものは殆んどない。象徴的なかつての朝鮮総督府の壮大な建物は、現在国立中央博物館として2000年に及ぶ朝鮮半島の文化遺産を展示しているのだが、それさえも過去の忌むべき遺物として近々取り壊されるという。

我々の世代は、日本統治時代の記憶を持たないし、歴史としても日本から見た通一遍のことしか教わって来なかった。植民地時代の民族の独自性までも抹消された屈辱的な生活、及びその歴史を忘れて避けて通ろうとする日本人の意識に対する批判、そして現在の分断国家という緊張状態、これ等についてあまりにも知らなさすぎた又は知っているつもりになっていたように思う。

日本と韓国のもつれた関係は、イギリスとアイルランドの関係に似ているところがあるという。興味深い比較である。韓国にしてもアイルランドにしても、被支配者の民族から見た歴史的事実をもっと知らねば、近くて近い国にはならないということを痛感させられた訪問であった。